

Bacteroides fragilis による超早発型敗血症をきたした 超低出生体重児の 1 例

児島加奈子^{1),2)} 太田 栄治¹⁾ 平井 貴彦^{1),2)}
小寺 達朗¹⁾ 音田 泰裕¹⁾ 川野 裕康¹⁾
新居見俊和¹⁾ 宮本 辰樹^{1),2)} 瀬戸上貴資¹⁾
廣瀬 伸一²⁾

¹⁾ 福岡大学病院総合周産期母子医療センター 新生児部門

²⁾ 福岡大学医学部小児科

要旨：偏性嫌気性菌である *Bacteroides fragilis* (*B. fragilis*) による新生児敗血症の 1 例を経験した。症例は、在胎 24 週 2 日に経膈分娩で出生した超低出生体重児の女児である。悪臭の強い羊水混濁がみられ、超早発型敗血症を発症した。経験的治療を開始したが、日齢 2 に血液の嫌気培養ボトルのみからグラム陰性桿菌が検出されたため、piperacillin/tazobactam (PIPC/TAZ) 配合剤に変更したところ、治療は奏効した。後日、母体の膈及び羊水、児の血液から *B. fragilis* が同定され、感染経路は上行性羊水感染と判明した。嫌気性菌による新生児敗血症は稀であるが、悪臭のある羊水混濁を伴う場合は、嫌気性菌を念頭においた適切な抗菌薬で治療を開始する必要がある。

キーワード：嫌気性菌, 新生児敗血症, 悪臭のする羊水, 子宮内感染症